

Weekly Michael's News

<今週の聖句>

2017年10月9日発行 No.49

『兄弟たち、わたし自身は既に捕らえたとは思っていません。なすべきことはただ一つ、後ろのものを忘れ、前のものに全身を向けつつ、神がキリスト・イエスによって上へ召して、お与えになる賞を得るために、目標を目指してひたすら走ることです。』
(新約聖書 フリリピの信徒への手紙 3:13~14)

<経済学部&国際別科の秋期入学式を挙行!! >

先週の土曜日に経済学部、また国際別科の秋期入学式を行いました。空は生憎の雨模様でしたが、期待と希望に胸を躍らせた学生（今回はほとんどが留学生）70名が入学しました!! 礼拝前に少し練習をすると、聖歌の歌声や祈りの声が大きくなり、これから始まる学生生活に向けて強い意欲が表れていました!! どんな出会いや成長が与えられるか楽しみですね!! 皆さんの学生生活が祝されたものになるよう、心からお祈りしています。またキリスト教センターにも遊びに来てね~ (^o^)/”



近藤先生の聖書朗読で式文を見つめる学生たち 学びへの意識が高い!!



「皆さんの入学を許可します!!」



新入生に向けて奨励を担当しました



前田理事長の祝祷



祭壇の前を埋める新入生 Welcome!!

<チャプレンコラム 一足お先に50周年記念式典を体験!! KIUは…?>

私は先々週の週末に前任校の50周年記念礼拝に出席してきました。同僚や同級生など懐かしい面々との再会に心温まる一時が与えられましたが、同時に「50周年」という、意味深さ・重さも考えさせられる良い機会となりました。KIUも次年度50周年を迎えます。教育の混迷が叫ばれる時代だからこそ、半世紀に亘って取り組み続けたキリスト教教育、学生一人ひとりの命を大切に受け止める歩みを見直し実践していきたいと心から願います。



<先週のメッセージ>

※ここでは実際に話されたお話の要約を掲載しています。

10月2日(月) テーマ:「一足早い50周年に参加して」 野間 光顕(チャプレン)

先週末、前任校の50周年記念式典が行われ久しぶりに母校を訪問した。会場は2,000人の収容を可能とする新潟市音楽文化会館。第一部はキリスト教学校の基本である礼拝形式で行われ、最後には学生全員がハレルヤ大合唱を披露した。第二部の記念講演会、第三部は記念演奏会と続き、卒業後に世界を舞台に活躍する芸術家を集めて圧巻の演奏が披露された。内容の濃い一日であったが、帰路の中で最も心に残ったのは礼拝説教の中にあった「教育は痛みを伴う営みである」という言葉だった。キリスト教教育の原点である生徒の命に謙虚に向き合う事の大切さを改めて心に刻む機会となった。

10月3日(火) テーマ:「外なる目線を確立して」 毛 丹青(経済学部)

国慶節を迎えた中国から多くの観光客が来日している。中国人は「声が大きい」という特徴があるが、これは実は言葉の構造の違いから生じている。日本語は母音中心、中国語は母音+子音で日本人には聞き慣れないし、大声で話しているように聞こえる。言葉の構造が違うという事を知る「外なる視線」が求められる。人間を知ろうと思うなら短絡的に一面だけを見るのではなく、むしろ多面的に、総合的に見て判断しなければならない。グローバル化が進み3カ国以上の言葉が話せる事が当たり前になりつつある。「外なる目線を確立する」とは私達の短絡的、一面的な物事の見方から脱する事である。他人を知る事は自分を知る事である。

10月4日(水) テーマ:「小学校の担任の先生」 服部 七良(学院事務局)

ある小学生の先生が5年生の担任になった時、クラスに不潔でだらしない少年がいた。その少年の1年次の記録を見ると「朗らかで、友達思いで、勉強もよくできる。」2・3年では母親の病死や父から暴力の記述があった。激しい衝撃を受けた先生は、その少年と放課後一緒に勉強を始めた。学年が上がり担任から外れたが、その少年とは手紙のやり取りを続けた。少年の卒業時には「先生は僕のお母さんです。」と書かれていた。長い年月が経ったある日、結婚式の案内状が届き、そこには「母の席に座ってください。」と書かれていた…。少年は逆境の中、一つの縁に出会い、その縁を一条の光として人生を送った。人は誰でも多くの縁の中で生まれ生きる。その縁をどう生かすかを考えたい。

10月5日(木) テーマ:「青年海外協力隊とグローバル人材」 市瀬 俊介(経済学部)

私は留学生の授業を担当する傍ら、青年海外協力隊(JICA)との繋がりが与えられており、同時にそこで様々な出会いを経験している。「青年海外協力隊」と言われると、アフリカの砂漠で黙々と井戸を掘る…そんな厳しい状況を思い浮かべる人が多いかもしれないが、実際には多種多様な職業や働きがあり、自分の特性や専門性を活かして様々な国々の人々と交流を持つことが最大の魅力である。以前は隊員として活躍され、今は面接官も勤めておられる男性に話を伺うと「隊員に最も必要なのは、専門性や知識でなく、人を愛する心」なのだそうだ。少子化、そして国全体が内向き志向になっている今こそ、青年海外協力隊を通して異文化交流・共生を見つめるのも良いのではないだろうか。

10月6日(金) テーマ:「今、心に刻みたい場所:ヒロシマ」 野間 光顕(チャプレン)

今年の夏も学生17名と共に「ヒロシマ平和旅考」を行った。記念式典が行われた平和記念公園には各種団体が主催するコンサートやイベントがあちこちで開かれておりとても賑やかだ。そんな中、一つの石碑が目にとまった。亡くなった方々の魂の平安と慰めを願って刻まれたであろう「慰霊」という言葉に思いを馳せる時、今自分が立っているこの場所にもたくさんの魂が、命が存在した事を確かに感じた。世界中が暴力と私欲に流されるその最中であってこの石碑から響いてくる無言のメッセージ、互いの命を認め受け止め合う「平和」を実現する歩みを大切にしたい。(文責:野間 光顕)